

この学部でしか、学べないことがある

卒業生からのメッセージ



吉山 真未さん
130期卒

旅行ガイドブック制作会社勤務

津々浦々に息づく神道文化を、
広く世界に発信したいと
願っています



私は小学校から高校までの12年間を、ミッションスクールで過ごしました。朝夕にはお祈りの時間があり、聖書が必携、そんな学生生活でした。ではなぜ、そんな私が神道文化学部の門戸を叩こうと思ったのか。そのきっかけは2つあります。

まず何よりも日本の文化が大好きだったことです。小さい頃から箏を習っており、着物を着るのも大好きでした。「日本文化の神髄を、より深く学びたい…」そう考えていた折に出会ったのが、神道文化学部でした。初めて行ったオープンキャンパスで、舞楽の写真が配された学部紹介パンフレットを見た時の、あの衝撃は今でも忘れられません。「私が行きたいのはこの学部だ」…そう心から直感したのです。高校2年生の時に見た大河ドラマも、またひとつのきっかけとなりました。劇中で登場した幕末の教育者・吉田松陰先生の生き方に深く興味を抱き、彼に関しての書籍を読み漁りました。そうしたなかで、世田谷区に松陰先生をお祀りする松陰神社がご鎮座していることを知り、ぜひともご奉仕させていただきたいと思うようになったのです。



入学してからは、様々なことに挑戦しました。入学のきっかけにもなった松陰神社で、3年間助勤をさせていただきました。また学部で出会った友人のご実家が奉仕する神社で、お箏の演奏を奉納させていただくこともありました。さらに大学主催の「古事記アートコンテスト」入賞がきっかけとなり、学部広報のイラ

スト制作にも関わらせていただきました。



卒業後、すぐには就職しませんでした。コロナ禍の学生時代には難しかった海外留学に、どうしてもチャレンジしたかったからです。念願の留学を終え、今は世界旅行ガイドブック制作の会社で、その「日本編」の編集に従事しています。「全国津々浦々、様々な風土と文化を、ぜひとも広く伝えたい…」、そんな思いで、全国各地を取材で駆け回る日々です。

神道文化学部は、学生の可能性を広げる学部です。日本の神髄・神道を学び、志を立てて励めば、将来への道が必ず開けてきます。志願者の皆さん、世界でただひとつしかないこの学部で、自分ならではの「志」を、しっかりと打ち立ててみてください。

吉山さんは
こんな学生でした！



吉山さんは「吉田松陰命(いのち)」の学生でした。松陰の旅路、その最後の日々を詳しく辿ったゼミ論。吉山さんの「松陰愛」が、隅々まで漲っていました。天性の絵心も素晴らしく、神道スピリットを見事にビジュアル化したアート作品の数々を、学部パンフやクリアファイルで、例年のように活用させていただきました。悲願の海外留学を終えた吉山さん。新「ディスカバー・ジャパン」の総り多き旅路を、心から祈って已みません。

ゼミ担当 武田 秀章教授

神道文化学部独自の各種講座 神道文化学部では、就職・奉職、および就職・奉職の「その先」を見据え、素養とスキルを高めるための各種講座を開催しています。(無料)



女子学生のための就職セミナー



マナー講座



書道講座



和歌講座



衣紋講座



田んぼ学校



御常講座

オープンキャンパス
(渋谷キャンパス)

8月3日(土)・4日(日)・24日(土)

お問い合わせ：入学課 電話 03-5466-0141

※学年は取材時のものです

神道文化学部の就職力！



齊藤ゆいかさん(神道文化学部学生)制作「tokoyonokuni」

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學

神道文化学部から一般企業へ



清水 豊さん
神道文化学部 4年

一部上場企業内定

文化の担い手として、
学ぶ楽しさを忘れず、
研鑽を重ねていきたいと
思います！



先生からのメッセージ



平藤 喜久子教授
「神話学」

神話の味わい方



私は小さい頃から世界各国の神話や童話、児童文学が好きでした。また、高校生の頃、和太鼓部に所属したことをきっかけに、あらゆる日本文化の根幹には神道の精神が根付いていることを学びました。それゆえ、自分の興味関心が詰まっている学部であることはもちろん、神道をはじめ世界各国の宗教や文化を学ぶことで、人々が織りなす有形無形の文化財の保存と、興隆に努めることが出来るのではないかと考え、神道文化学部に入學いたしました。



「知は力なり」という言葉があるように、多種多様な学問を識ることは自身の価値観や人生の選択肢を広げること。と考えていた私は、神道学や宗教学をはじめ、考古学や美術史、心理学、ジェンダー論、外国語など、自分の気になる科目を片っ端から受講しました。その結果として、それぞれの学問の奥深さを識る楽しさはもちろん、多角的に物事を窺う姿勢が身につきました。また、学んだことを「宗教文化士」や「博物館学芸員」の資格取得に活かすことができ、それが自分自身の選択肢を広げることにつながったと思っています。



サークル活動は服飾研究会に所属し、ファッションやメイクに関する雑誌の撮影や編集、刊行に携わりました。交流の輪が広がるだけでなく、多くの人の価値観に触れることができる貴重な経験でした。



多様な学問の中で、特に興味深く感じたのは「神話学」の授業です。1年時、2年時と続けて受講し、気づけば3年時の基幹演習で平藤先生の神話学ゼミに入っていました。私は森と湖の国であるフィンランドの神話や古謡を研究しました。人々の織りなす文化が移ろいゆく時代の中でどのように変容し受け継がれてきたのか、また、これからどのように受け継いでいくべきなのか、神話はその道のりを物語っています。



学び多き國學院大學での4年間は、今後の人生における大きな糧です。卒業後はご縁あって、様々な文化芸術支援を行っている企業に就職が決められました。今後も文化の担い手として、学ぶ楽しさを忘れず、研鑽を重ねてまいります。



後輩の皆さん、実り多き大学生活へと進めるよう、心より応援しています！



清水さんは
こんなゼミ生！

3年生の時フィンランドの神話、文化を研究したい、と熱心に取り組んでいました。参考文献も少ないなかで、基礎的なところから積み上げて素晴らしい論文になったと思います。授業中にまっすぐなまなざしを向けて話を聞いている姿がとても印象的です。

ゼミ担当 平藤 喜久子 教授



神話というと、どのようなイメージを持っていますか？古めかしい文章で記された難しそうな文献。ゲームやアニメ、マンガに登場する楽しい神々。どちらも神話の姿です。たしかに 神話は、古い文献に残されている場合が多いので、とっつきにくく、難しそうに思われるかも知れません。ギリシャ神話であれば古代ギリシャ語で書かれていますし、日本神話も8世紀の日本語です。これらの原文に取り組もうと思うと、地道なトレーニングが必要です。でも、神話に触れる、ということとさまざまなアプローチがあります。日本語訳や現代語訳。小説風に訳されているものもあればマンガもあります。まずは神話に触れること、そこからはじまります。



神話に触れたその先には、自分なりの神話の味わい方が待っています。わたしの専門は神話学です。さまざまな神話を比較したり対照させたりしながら、人間について、文化について考える学問が神話学。神道文化学部で私が担当している授業では、神話学の見方を学びながら、学生みなさんに自分なりの神話の味わい方を見つけてもらうことが目標です。



ゼミでは、学生たちが試行錯誤しながら神話や神と向き合っています。神道文化学部という神道や日本神話だけと思われがちですが、まったく違います。世界の神話の剣、怪物、英雄、北欧神話やケルト神話、ゲームと神話等々、わたしが知らないことを教えてくれる学生もいて、自然とお互いに知識や視点が広がっていきます。みなさんも、わたしたちと一緒に自分の神話の味わい方を見つけてみませんか？



平藤先生は
こんな先生！

平藤先生は話の引き出しが非常に豊富な方です。世界各地の神話のみならず、宗教や歴史、芸術など、あらゆる文化への造形が深いため、演習における研究の際には様々な視点からの助言をいただきます。また、定期的に海外へ行かれるので、貴重なお土産話をたくさん伺うことができます。

ゼミ生 清水 豊さん



神道文化学部から公務員へ



藤井 優衣さん
神道文化学部 4年

地方公務員内定

市役所職員として、
また神職として
生まれ育った街を
支えていきたい



私の実家は神社で代々神職を務めております。そのため、小学校の頃から國學院大學への入学を考えており、高校の頃には進路に迷うことはなく、國學院大學の入学を決めました。



入学して1年目は、新型コロナウイルス感染症の影響で大學キャンパスも閉鎖され、地元でリモート授業を受ける日々でした。レジュメの書き方も分からず、図書館も使えない状況で、大學生活になじめない期間が長かったように感じます。

しかし、2年目からはキャンパスでの大學生活が始まり、かねてから希望していた「瑞玉會」という祭祀サークルにも入れました。瑞玉會では、学校併設の神殿で毎月月次祭等を行ったり、毎週神殿清掃を行ったり等…実際の神殿での御奉仕を通して、神明奉仕の心を養うことができました。



大学の授業では、様々な先生から学びを得ることができました。神道のエキスパートである先生方から、豊富な人生経験を基にした授業を聞けるのは、高校までの授業とは全く異なる体験で、非常に心惹かれるものでした。また、教科書に載っていないような地方の

祭礼や古代の祭式まで幅広く熟知されており、少しでも気になった点があれば気軽に質問することができ、その場ですぐ回答をいただけることで、すごく勉強になりました。あらためて、恵まれた環境だったなとありがたく思います。



卒業後は地元に戻り市役所で勤務しながら、実家の神社にて御奉仕する予定です。市役所職員として、また神職として、二足の草鞋ではありますが、どちらの面でも生まれ育った街を支える人をめざし、これからも頑張っていきます。



國學院大學は実家が神社の人だけでなく、全く神道を知らない人、社会人経験を経て入学した人、北海道出身から沖縄出身まで幅広い人が集まっています。また先生方の専門分野も多岐に渡り、入学してどのような研究に進んだとしても、必ず導いていただけることでしょう。今神道に深い興味を持ってなくても、入学すればきっと興味を抱く、熱中できるものに出会える、そんな大学だと自信を持って言えます。



藤井さんは
こんなゼミ生！

藤井さんは、地元の祭礼について熱心に研究していたことが印象的でした。近隣の祭礼との比較検討など、藤井さんならではの観点から調べられた内容を発表する姿は、他のゼミ生に対して学ぶことの楽しさを示してくれる素晴らしいものでした。ご自身のご研究を糧にしながら、地元での更なるご活躍を期待いたしております。

ゼミ担当 鈴木 聡子 准教授

先生からのメッセージ



鈴木 聡子 准教授
「神社史」

充実した学生生活を
送ってみませんか



私自身、神道文化学部になる前の文学部神道学科の卒業生です。学部で学んだあと大学院で研究を続け、平成31年に神道文化学部の教員として着任しました。



私の研究は、神社の祭りの歴史についてです。その中でも特に神社で一年を通して恒例に行われる神社年中行事が、いつ、誰によって、どのように創始されたのかということに興味を持って調べております。



このテーマで研究するためのきっかけは、恩師と学友の存在です。学部学生時代、同じ志を持つ仲間と全国の神社に参拝し、その歴史と文化に触れたことで生じた興味や疑問などを、共に調べ語り合ったことにあります。また、調べていく過程では先生と密に御指導をいただき、助言を受けながら学びを深めていきました。このような何物にも代えがたい貴重な経験こそが私の研究テーマの出発点となったのです。



本学部の魅力は、私が経験をしてきたように、常に学生に寄り添いながら学びを示すなどして学生生活を見守ってくれる学部教員の存在と、「神道文化」という共通の興味関心を強く持ち全国から集まって来る学

友の存在にあると思います。また、学生達が主体となって舞楽や管絃を奏する10月の観月祭などを執り行っていることも魅力の一つです。皆で一体となって行事を運営する学生の姿はなんとも充実感に満ちたものがあります。このような環境のなかで、同じ志を持つ学友とともに自分らしい学びを深め、充実した学生生活を送ってみてはいかがでしょうか。



鈴木先生は
こんな先生！

皆全く異なる研究をしているゼミ生が多くいる中で、一人ひとりの研究に深く共感してくださったり、関連する祭礼や参考文献などを教えてくださる、とても博識で優しい生徒に大人気の先生です。

ゼミ生 藤井 優衣さん



神道文化学部から神職へ



工藤 豪士さん
神道文化学部 4年

奉職内定

学びの道を
歩み続けていこうと
思います



私は一般家庭の出身ですが、ご縁があって高校卒業後に伊勢の神宮研修所という2年制の神職養成機関に入学しました。そして卒業後、更に学びを深めるために、國學院大學へと進学しました。



神道系の大学は全国に2校ありますが、私が國學院大學を選じたのは神社実習生制度があるからです。この制度の魅力として、経済的な負担を軽減できることが挙げられますが、日々実際の祭祀の場に身を置くことができるという点も大きな魅力です。私は4年間、靖國神社に御奉仕し、祭典奉仕や神饌調理、紙垂・人形の調製等を行っていました。4年次の秋季例大祭では、天皇陛下からの幣帛を納めた唐櫃を担がせていただき、身に余るほどの貴重な体験をさせていただきました。



大学の授業の中で特に印象深かった科目は、3年次から始まる基幹演習(ゼミ)です。私が所属した笹生衛先生のゼミでは、神道だけではなく仏教に関する文献・遺跡、認知宗教学、更には理化学的なデータを用いた学際的な研究を通して、祭祀の根底にある「神観」の変化、そして祭祀の意義について学びました。



神宮研修所を卒業して以来、伊勢の神宮の祭祀に興味を抱き続けてきた私は、笹生先生の多角的な視点による研究を参考に、「神宮祀官の神観の変化と御饌殿祭祀」をテーマとして研究を行いました。



卒業後の進路は神社への奉職か大学院に進学するかで悩みましたが、学問と実践との両輪が重要であると考え、神社に奉職させていただくことになりました。本校の名前の由来である「国学」、その礎を築いた本居宣長は、学問に重要なことは才能の有無ではなく、「年月長く倦まず怠らずして、はげみつとむることぞ肝要」であると述べています。



奉職後は神様と人との「仲執持」として励むことは勿論、神職のもう一つの使命である「祭祀の厳修」のために、学びの道を歩み続けていこうと思います。



工藤さんは
こんなゼミ生！

工藤さんのゼミでの研究は、神宮における御饌殿祭祀を、祭りの構成の歴史的な変遷を細かく跡づけ、神の考え方の変化と、その背景を明らかにしたものです。彼の真面目で誠実な人柄を反映した優れた内容となっています。今後は神職として祭祀を実践しながら、研究も深めてもらいたいと思います。今後の大成を期待しています。

ゼミ担当 笹生 衛 教授

先生からのメッセージ



笹生 衛教授
「日本考古学」

國學院大學や神道文化学部で
学ぶことの楽しさについて



私は、日本の考古学と宗教史を専門としています。私の研究は、神祭りや神社の歴史を、文献と考古学の研究成果を結びつけ、さらに自然環境との関係を総合して具体的に復元し、その意味・背景を考えようというものです。私は國學院大學大学院を修了した後、公務員として遺跡の発掘調査と文化財の保護行政の現場に身を置く一方で、青少年教育施設の職員や博物館学芸員としても多くの経験を積むことができました。そこでの経験で得られた多方面への興味・関心が、私の研究の基礎となっています。現在は、日本列島の自然環境の中で育まれた神祭りの伝統を人類史のなかに位置付けられないかと試行錯誤を繰り返しています。



神道文化学部では私は、宗教考古学の講義と神道史学演習(ゼミ)を担当しています。考古学の分野においては、日々、新たな発見が続いています。私の講義では、新たな発見と研究成果をできるだけ反映させ、写真・図面などを多用して神祭りや神社の歴史を最新の視点から具体的に見直すことができるように心がけています。ゼミでは、自然災害と神・祭りとの関係に焦点を当てたり、古墳や墳墓における埋葬の実態から死者の考え方を検討したりしています。そこからは現代社会

における災害や死の問題を考えるうえで大きなヒントが得られると考えているからです。



大学での学びは、自らの興味・関心にもとづき、楽しみながら積極的に取り組んでみてください。それにより、皆さんが人生を歩むうえでの新たな道標が浮かび上がってくるはずです。



笹生先生は
こんな先生！

笹生先生は宗教考古学を専門とされており、「自然災害」や「気候変動」をテーマに文理融合の学際的な研究も行われています。多角的な視点によるロジカルな授業によって、いつも知的好奇心を刺激されておりました。とても和やかな雰囲気のある先生で、学生一人一人に対し的確かつ懇切丁寧な指導を行ってくださいました。

ゼミ生 工藤 豪士さん

